

幼児の歌の習得過程に関する分析研究 (2)

—— リズム運動について ——

中 西 智 子

A Research on Infant's Learning Process about Songs

Satoko NAKANISHI

は じ め に

幼児が歌や歌詞のない音楽に合わせて身体を動かしている時は、身体を動かすことがおもしろいかのように、生き生きとした表情をしている。手あそびや身体あそびの「あそび歌風」、振り付けられた舞踊のようなもの、子どもの自由な発想で動く「身体表現」など、そして、～体操といわれている幼児体操をも含めて、幼児はリズムにのって動くことを楽しんでいるように思われる。

特に、2～3歳児がおもしろがっている動きは、“おしりを振ることが愉快的気分になるから”“速いテンポの曲に合わせて走り回れる”などの簡単な動きである。しかし、4～5歳児になるともう少し型の整った、アクションのようなハッキリした大きな振りを好み、音楽の拍に合わせた動きになる。このような幼児の好みの傾向に大きく影響を与えているのが、テレビの幼児番組や歌謡番組だといわれて久しい。

多くの幼児はテレビというマスメディアによる文化的環境の変化を背景にして、歌や歌詞のない音楽に個々の好みの変化が表れ、同様に、音楽に付随する～体操やアクションに対してもテレビの影響で好みは移り変わっている。

テレビの番組が幼児に大きな刺激材料として影響を与えているとの認識は一般的になっているが、このような幼児をとりまく文化がはたして、音楽教育の領域からみてどのように音楽学習の発達に関与するのであろうか。

本稿では、幼児が歌いながら幼児の内発的な好奇心によって積極的に身体を動かす状況があれば、幼児の歌の習得に促進効果があるのか、あるとすれば歌の音楽的な要素の何において有用なのか、について実験的に明らかにしたい。

1 幼児が好む「歌と動き」に関する文化的環境

1-1 視覚的な情報としてのテレビ番組の推移からの考察

NHKが昭和3年に通信省とともに始めた「ラジオ体操」を源として、「ラジオ体操」と並行して昭和29年～40年にラジオ(39年まで)とテレビで「美容体操」が放送された。元NHKのディレクター小谷節子によれば、「美容体操」は家事労働といった偏った筋肉労働をする家庭婦人の生活機能を旺盛にするなどの主旨で制作されたが、母親と一緒に幼児が「美容体操」を真似るといわれることからの発想で、幼児のための「たいそう」を幼児番組の中で放送する

ことになった（注1）。

その結果、昭和36年に「うたのえほん」という幼児のための歌番組で『元気でいちに』のうたのえほん体操が誕生して以来、現在の『ぞうさんのあくび』まで30年間続いている。昭和39年の東京オリンピック開催を契機にテレビの普及はめざましく、平成の現在では衛生放送の受信とともに、一家に数台のテレビ保有となり、幼児とテレビの関係は、一層親密になった。

さらに、幼児の就園率の高まりとともに、在宅の幼児の年齢が2～3歳と低くなる傾向が表れ、昭和44年からは、「おかあさんといっしょ」の番組のなかに2～3歳児を対象とした『ジャンボンボン』体操がスタートしている。民放でも「ピンボンパン」「セサミストリート」「ワンツードン」「ひらけボンキッキ」など幼児番組がブームになり、幼児はテレビを見ながら身体を動かすことを楽しみ、それが日常的になっていった。

商業ペースでも昭和47年に『ピンボンパン体操』がヒットして日本レコード大賞童謡賞を授賞するなど、幼児を対象にした音楽市場は広がっていった。

一方、歌謡界では昭和53年ピンクレディーの『U F O』に始まって、昭和58年『めだかの兄妹』平成2年『おどるボンボコリン』など、幼児や小学生から大学生などの大人までが振りを付けて歌い踊るほどに全国を風靡した。このように素人にも真似やすい派手な振りの動きが多くの人に好まれることから、現在ではポピュラー音楽や演歌の歌手たちは、あて振りも含めて、程度の差はあるが振りを付けて歌うようになった。そして、歌は振り付けがあって始めて一つの商品として成り立つかのようになった。今では昭和30年代の東海林太郎のように直立不動で歌う歌手は見られなくなった。

幼いころから以上のような社会環境に育った10代20代の人々は、歌によってノリを充分満足するためには不正確ながら動きが必要なようで、正確に振り付けられた動きの通りにこだわるわけではない。しかし、振り付けられた動きの型が歌の人気（タレントの人気）に響くこともあるようである。

そして、平成3年の現在は、民放では「ひらけボンキッキ」を残して幼児番組は姿を消し、NHKでは「ワンツードン」と「おかあさんといっしょ」の番組の中で歌と動きが一体となった映像が送られ続けている。これらの番組は在宅の幼児に高い視聴率で支持されている。3歳位までの幼児には、テレビから歌や音楽を聴けば（観れば）本能的な気持ちの表出として、歌や音楽に合わせて身体を動かさざるをえなくなるかのような動きが観察されることがある。しかし、4～5歳の幼児になると特定の目的をもって映像を観て、聴いて、そして歌や音楽に合わせて身体を動かすようである。彼等は番組内容の好みが明確になり始めると、観ているうちに覚え、覚えた動きの型を参考にして自分なりに自由にアレンジ（難しい、面倒なフレーズは適当に等）して勝手に動いて“思わず楽しい気分”を味わう。もし、アレンジする素がなければ動きは不自由になり、彼等に動きの充実感が満たされることは少なく、かえって、歌うことが苦手な活動となるであろう。

また、4～5歳になれば、テレビの前で一人で映像に合わせて振りを付けて歌うことに満足できる子は少ない。なぜなら、音楽の本質は何かのコミュニケーションが伴うものであり、テレビからの一方的な働きかけではものたりなさを感じ始めるからである。そして、覚えるための歌と動きではなく、そうすることが嬉しいからするのであり、そのためには一人より友だちがいた方が楽しいことに薄々気付き始めたからである。

1-2 先生や仲間からの教えられた「歌と動き」

古くは、明治7年(1874年)頃から、愛知師範学校長の伊沢修二が「胡蝶」(現在は「蝶々」の題名で親しまれている)等を唱歌遊戯として指導することを奨励したように、歌に合わせて身体を動かすことは西欧の教育家の影響を受けて教育現場に浸透していった。そして、明治30年代に滝簾太郎・東くめのコンビで「お正月」「水遊び」「はとぼっぼ」に代表される言文一致唱歌が主流になってきた時、唱歌遊戯に対しても、大人の発想の遊びや動作を批判する声がありはじめていた。

大正から昭和にかけて幼児のもっている自由さを取り入れた律動遊戯・律動的表情遊戯を土川五郎の創始で普及し、戸倉ハルが受けついで考案した「ハトポッポ体操」が運動的な遊戯として教育現場で受け入れられた。小林美実によれば、戦争の影響で昭和15年頃からは遊戯が団体訓練の場と考えられ、戦争色の遊戯が指導されていた。しかし、次第に幼稚園は閉鎖され、終戦をむかえた(注2)。

昭和22年に「教育基本法」「学校教育法」「児童福祉法」の制定によって、「リズム」の項目が示され、昭和36年には教育要領六領域に「音楽リズム」平成3年には教育要領五領域に「表現」として、歌うことと身体を動かすことを一緒にした活動は名称と内容に大きな変化があった。

しかし、伊沢修二がフレーベル等の影響を受けて唱歌教育に遊戯を取り入れる以前から、我が国では先生に教えられるまでもなく、子どもたちは幼児期からわらべうたで遊んでいた。嘉永4年(1851年)生まれの伊沢修二も幼い頃信濃の国で遊んでいたのではないだろうか。わらべうたで遊ぶとは、仲間と一緒に歌いながら遊ぶ(身体を動かす)ことであり、あるいは、遊び(身体を動かし)ながら歌っていたのである。この場合は、“やらされる”“やらなければ”“見せるため”ではなく、子どもも社会で彼等の主体性によって“自分たちの発想による自分たちの選んだ”動きの表現、即ち、遊びであった。そして、一応の決められた形はあっても、仲間内で変えて楽しめる選択の自由の基に、もっともっと自分たちの遊びよいように変えて、その成果を次の世代へと伝承してきた。

本来、子どもは遊ぶことにに関して貪欲に知識を吸収しようとする。社会情勢、流行り言葉、動物の動き、なんでもが彼等の発想で取り入れられ、子どもたちは遊ぶのに必要な歌を生み出したり、歌に関連した遊びを生み出したりして、巧みに歌と遊びの関係を楽しんでいた。

生活という文化的環境の変化を背景にしながら子どもたちの遊びの好みが変わっていき、同時に子どもたちの求めるものの質的な変化もあった。しかし、どの時代にあっても、子どもたちが歌いながら愉快地身体を動かすことに気持ちの高揚があるとすれば、歌いながら身体を動かすことが何らかの“やる気”を起こさせる効果をもっていると考えてよいであろう。

例えば、指示通りに身体を動かすだけに留まらず、友だちの手応えをみながら次第に自分の思い尽きを試みるとか、歌詞を早く覚えたいとの気持ちが高まることなどが考えられる。

2 歌いながらリズム運動のように身体を動かす指導 —リズム運動についての考察—

幼稚園などでは幼児が歌いながら身体を動かしている姿を観察できるが、一人の場合には気に入ったフレーズを部分的に歌い、瞬間に終わってしまう。

一方、友だちと一緒に半ばふざけているように好きなフレーズを歌い始めた場合には、各自が自分流に動き、友だち同士が刺激しあうのか、競うように歌の全体を歌うことが多く、一通り歌って終わるより、疲れるまで続けていることが多い。その時の歌のテンポや旋律は自分の

身体の動きのリズムによって一定することはなく、テンポは揺れている。

しかし、歌詞は「替え歌」のように意識してもとの歌詞を替えない限りは、覚えたとおりに歌い、1番2番と沢山の歌詞を覚えていることを得意にしているかのようである。

例えば、皆で声を合わせて歌って、それが楽しくって身体がリズムにのって動き、段々興奮して終いにメチャクチャになることがある、このような経験は音楽教育の視点からどのような教育的評価があるだろうか。

既に、テレビ視聴などの影響で歌や歌詞のない音楽で動く楽しさを知っている幼児が、仲間や指導者と一緒に声を出しながら音楽することの解放感、満足感を経験しながら、歌を習得する過程について考察した。

なお、この研究は三重大学教育学部研究紀要第42巻（教育科学）1991年に発表した「幼児の歌の習得過程に関する分析研究（1）－手あそびについて－」に続いている。

指導プログラム、実施時期、考察の手順は上記と同じであり省略する。

・ 課題曲とリズム運動

「ピノキオの歌」東 康介・山本澄子作詞、田中正史作曲（楽譜1）。振りは実験にあたって創作した（図1）。

「山羊さんとかけっこ」吉岡 治作詞、小林亜星作曲（楽譜2）。振りは実験にあたって創作した（図2）。

・ 被験児

c：「ピノキオの歌」を歌いながらリズム運動をする5歳児15名（男児5・女児10）

c'：「ピノキオの歌」を歌う5歳児15名（男児9・女児6）

d：「山羊さんとかけっこ」を歌いながらリズム運動をする5歳児15名（男児9・女児6）

d'：「山羊さんとかけっこ」を歌う5歳児15名（男児5・女児10）

2-1 1日目の指導を終えて

3日間の指導後と一ヶ月後の幼児の歌声を録音（計4回）し、その全てを採譜した楽譜をもとに考察した。そして、リズム運動をしながら歌った子とリズム運動をしないで歌った子の歌詞、リズム、旋律に関する正誤の結果を図3～図26にまとめた。さらに、音楽的なまとまりを調べるために録音の歌声を聞き取りで5段階に評価した。その結果は表1の如くである。

表1 正誤表からの結果と5段階評価（音楽的なまとまり）の平均点

		1回目	2回目	3回目	4回目
歌 詞	c	$c < c'$	$c > c'$	$c \approx c'$	$c = c'$
	d	$d > d'$	$d \approx d'$	$d \geq d'$	$d = d'$
リ ズ ム	c	$c < c'$	$c > c'$	$c \approx c'$	$c \geq c'$
	d	$d > d'$	$d \leq d'$	$d > d'$	$d \geq d'$
旋 律	c	$c \leq c'$	$c > c'$	$c \approx c'$	$c \approx c'$
	d	$d \approx d'$	$d \geq d'$	$d > d'$	$d > d'$
5段階 評 価 音楽的な まとまり	c	2.61	3.29	3.5	3.39
	c'	3.28	2.72	2.85	2.73
	d	3.04	3.04	3.86	3.31
	d'	2.52	2.75	2.58	3.02

・「ピノキオの歌」

表1によれば、初めて習った歌を音楽的なまとまりをもって歌えていたのは、C'：リズム運動をしないで歌ったグループの方が、C：リズム遊びをしながら歌ったグループより良い成績だった（C：2.61＜C'：3.28）。そして、採譜した楽譜からの結果は、歌詞、リズムについてはC＜C'で正確だったが、旋律ではCよりC'の方が少しの差で正確に歌えている子が多かった。

歌詞について（C＜C'）

「ピノキオの歌」は歌詞内容が幼児の知っている話と一致していることを知らせておいたので、C'：リズム運動をしないで歌唱指導をするグループの幼児は、指導者の歌声を初めて聞いた時は歌詞を書いた大きな紙に注目してかすかに声を出していた。しかし、C：リズム運動をしながら歌唱指導をするグループの幼児は、指導者の身体の動きに興味を示し、指導者の方を向いていた。

1日目の指導後に幼児の歌声を個別に録音し、C、C'のグループ別に歌詞を正しく歌った割合を示したのが、図3である。

C、C'共に正しく歌詞を歌ったのは、「ピノッキオ」（1、2、4、17、18、21小節）であった。良く知っている単語としての歌詞は歌いやすく、C'のグループでは全員が歌っていた。Cのグループのなかには、「ピ」が抜けて「ノッキオ」となる子「キノッキオ」と歌う子などがいたが、それぞれに「ピノッキオ」の認識はあると考えられる。

「ピノッキオ」の物語から幼児に理解できる単語として歌全体の歌詞が選ばれていると思われるが、Cのグループは指導者の動きに関心が向いていたのか、図3の如く、C'のグループより歌詞の習得率が低かった。

そして、6、7小節でC＜C'の差が大きいのも、Cのグループは指導者の動きに関心がいったからであろう。

3、20小節目の「ピノピノピノキオ」を「ピノピノピノピノ」「キノキノキノキノ」と歌う間違いの傾向がC、C'に共通していた。後者は「ピノッキオ」を「キノッキオ」と歌う子の場合であることから、両者は共通した事情があると考えられる。作詞者には予想外の間違い方と思われる。しかし、幼児の視点からは前後が「ピノッキオ」の歌詞に挟まれた歌い良い語呂として、さらには、四拍子の曲にのったノリとして、幼児には自然に「ピノピノピノピノ」と歌ってしまった事情と成り行きがあると考察する。

リズムについて（C＜C'）

幼児に一番覚え易い歌詞「ピノッキオ」の部分（1、2、4、17、18、20小節）を歌詞とリズムの習得率を図3と図7で比較すると、ほぼ一致している。話し言葉では、♪♪♪♪だが、幼児が曲の弾んだイメージで歌った歌詞のリズムをリズム譜にすれば ♪♪♪♪♪になったのである。その他の小節においても、歌詞とリズムの習得率が似ていることから、曲の流れの中で歌詞とリズムの相性が非常に良い例といえよう。

C'の歌うだけのグループでは ♪♪♪♪♪を ♪♪♪♪♪と歌っていることから、歌だけを覚える場合は習い始めの頃は話し言葉のリズムに影響されやすいと考察できる。

旋律について（C≦C'）

1、2、4、17、18、20小節の歌詞は同じで、旋律線も4小節目を除いては酷似している。しかし、4小節目は2拍と3拍が同音になっている。Cでは11人中4人が同音で歌っていたが、

C'にはいなかった。リズム運動をしながら歌うことは、音楽の構造理解として、一つのフレーズの終止感の感覚をつかむのに役立つと考えられる。

20小節目の歌詞の習得はC、C'共に低かったが、旋律に関してはC'のグループの習得率はCに比べて極めて高い。3小節目の歌詞、旋律も20小節目と同じであるが、この場合は歌詞の習得は良いが、旋律の習得が良くない。4度上がり順次2度づつ下行する旋律は、曲全体の流れのなかでつかむものであろう。

・「山羊さんとかけっこ」

表1によれば、始めて習った歌を音楽的なまとまりをもって歌えていたのは、d：リズム運動をしながら歌ったグループの方が、d'：歌うだけのグループに比べて評価が高かった（d：3.04＞d'：2.52）。そして、採譜した楽譜からの結果は、歌詞、リズムについてはd＞d'で正確だったが、旋律ではdとd'の差はなかった。

歌詞について（d＞d'）

1日目の指導後に個別に録音したグループ別の習得率を示した図15によれば、2、8、12小節でdのリズム運動をしながら歌ったグループの全員が歌詞を正確に歌った。d'のグループでも1、2小節の習得は高い。この「山羊さんとかけっこ」は、曲名と歌い始めの歌詞が同じであるために1、2小節目の習得が高かったと考えられる。しかし、8、12小節に関しては、dの全員が間違えることなく歌えたのは7、11小節の歌詞からの意味の関連性を感じたからであらう。

このことは、dはリズム運動によって曲のフレーズを理解し、音楽の構造理解が進んでいるからであらうと考えられる。一方、d'でも6、8小節の正しく歌った割合が高くなっていることや、9、10、11、12小節と少しずつ割合が高くなっている事実から、dに比べれば劣るが、フレーズ感覚が芽生えていることが考察できる。

リズムについて（d＞d'）

5小節目の歌詞はd'の歌うだけのグループには覚えにくく声がでてなかったことから、リズムの成績も悪くなった。しかし、3小節目のリズムが歌詞より成績が悪くなっているのは、「とことこ」の言葉のリズム（♪♪♪♪または ♪ ♪ ♪ ）と、歌のリズム（♪♪♪♪♪）が1回の指導では習得できなかったと考えられる。このことは、dとd'に共通している。同様に、9、10小節の場合も歌のリズム♪♪♪♪に歌詞を入れるには、幼児には少し難しかった。

旋律について（d≒d'）

旋律の評価は図23のように、実線と点線で示した。例えば、1小節目のA、Fis、D、Hの4つの音符Aからは長3度下がり、短3度下がり、そして長6度上がっているが、このように正確に音程が取れなくても、旋律線の動きが近い場合を点線で図に書き加えた。

dのリズム運動をしながら歌ったグループとd'の歌うだけのグループに共通して旋律が取れなかったのは、1、3、5、7、9小節であった。1、3小節は下行の音程が3度ずつで、上行の音程が6度7度と幅が広いのが原因であろうと思われる。5、7小節は同音が続くことと、下行の音程が半音であることが歌いにくい原因のようである。9小節では4度上がるところで上がりきれなかった。

このように、音程の幅が広い旋律を正確に歌えるようになるには歌い慣れることが必要であるが、リズム運動をすることが旋律の動きを感じ取る助けをしているようにも考えられる。

11小節目に関しては1小節目と比較すると歌詞は同じだが音程が違っている。このような場合には、言葉の抑揚に近い旋律の方が歌いやすいのではないだろうか。「やざさん」の言葉の抑揚に合っているのは11小節目である。図23によると、dは変わらないがd'は11小節目の方がやや成績が良くなっている。

全体的に、幼児は歌詞を覚えても言葉としての認識であり、特に歌い慣れないうちは、音程についての意識は薄いようである。

2-2 2日目の指導を終えて

・「ピノッキオの歌」

Cのリズム運動をしながら歌うグループは、男児が1日目に教えられた動きではなく自分流にアレンジして歌い始めた。その子に影響されたのか、指導者とは違う動きをしながら友だち同士で真似をしあう姿が見られるようになった。しかし、一人の男児は保育室の後ろの方で気乗りしないように踊っていた。指導者が誘っても仲間の方には来ないで、仲間を眺めながら指導者と同じリズム運動をしながら歌っていた。

この日の最後に、指導者は座って歌うことを提案した。幼児は座って前奏を聞きながら「なんかなんか……」「なんかうきうきする」「かってにからだがうごく」と言い、上半身を揺らしながら歌った。歌いながらずっとスキップをする子、5小節目の4拍の休みを膝を叩いて拍子をとる子、歌の終わりにジャンプして座り込む子など、各人が自分の思う通りに動きながら歌った。

C'の歌うだけのグループでは、前奏を聞く前に「せーのーでー」と子どもたちが言って歌い始めた。そして、女兒4人が立ち上がって手を繋いで手を振りながら歌い出し、14~17小節の「そらはあおいぞ さぁおどれ」をスキップしていた。他の子たちは彼女たちをニコニコと眺めながら歌っていた。4人の女兒は最後までスキップをしたり手を振りながら歌っていた。

指導の途中で「もっと違ううた」の声が出たが、「いやだー いやだー」のおおぜいの声によって「ピノッキオの歌」を歌い続けることになった。

指導の終了前に、男児が振り付けを提案したのはずみとなり、その子の真似をしながら歌う子、自分独自の振りで動きながら歌う子、振りはないが立って身体を揺らしながら歌う子などで、座って歌う子はいなかった。

表1によれば、歌声を音楽的なまとまりで評価した結果はC：リズム運動をしながら歌ったグループの方が、C'：リズム運動をしないで歌ったグループより良い成績だった（C：3.29＞C'：2.72）。そして、採譜した楽譜からの結果は、歌詞、リズム、旋律でC＞C'で正確に歌っていた。

歌詞について（C＞C'）

3小節目の歌詞は全員が「ピノピノピノピノ」と歌っている。指導時に歌詞の注意をして正しい歌詞「ピノピノピノッキオ」の確認を取っていたが、録音をするという「張り切った気持ち」「勇んだ気持ち」からであろうか、C、C'共に「ピノピノピノピノ」になった。



一方、20小節目の歌詞は3小節目と同じであるにもかかわらず、リズム運動をしながら歌ったグループには「ピノピノピノッキオ」と歌った子が僅にいた。図4の如く、前日の1回目の録音に比べると、全体的には歌詞の習得は良くなっているといえるが、3、20小節目の歌詞を歌詞どおりに歌う子は少数派になった。



幼児のアレンジで彼等の「ピノッキオの歌」の歌詞が定着する雰囲気になってきた。

11小節目「おしゃべり」の歌詞では、話し言葉のように「おしゃべりな」と歌った子が10人中2人いた。前後の歌詞の意味内容からは彼等の言葉使いが自然であろうと思われる。歌い始めて2日目の幼児には、歌詞の記憶は自分の使い慣れた表現、日常的な自然な言い回しの表現に頼っていると考えられる。

リズムについて (C>C')

2日目の録音からの図8と前日の録音からの図7を比較すると、C、C'共に、5小節目を除いて全体のリズムの習得はよくなっている。5小節目の全体符の感覚が2日の指導ではまだつかめてないようだが、他の小節にある4拍目の四分休符は休んでいる。

3小節目を「ピノピノピノピノ」と幼児がアレンジしていたが、リズムは本来のスキップのリズム ( ) にのせて歌っている。むしろ、八分音符で歌ったのは、C'の1人であった。

C'のこの女兒が  を  で歌うのは、歌詞の言葉をはっきり言おうと意識しているためであろうと思われる。C'ではこの子だけが5小節目の全体符を正確に休んでいることから、拍子感覚が優れていると考えられる。拍子感覚で歌った場合には、4拍目の四分休符の確認が取なければ3拍目を2拍分伸ばすように歌うものである。彼女の歌声の録音結果 (楽譜3～楽譜6) から、拍子感覚の基盤をもって歌の習得が進んだと考えられる。

旋律について (C>C')

前日の1回目の録音からの図11と2回目の録音からの図12を比べると、2日目の指導で旋律の習得はC、C'共に良くなっている。

図4に明らかなように、2日目の指導後の録音では歌詞「ピノッキオ」の小節は揃って習得率が高かったが、図12に示されるように、「ピノッキオ」の旋律に関しては不揃いが目立つ。「ピノッキオ」の4小節目の旋律を正しく歌った子はC、C'共にいなかった。図11のように、前日には歌っていた子が少しは歌い慣れたであろう2回目の録音で歌えなくなっている。

2日目にはC、C'共に幼児は身体を動かし、その勢いで歌っているような様子が感じられた。一つの歌を習得していく過程には、落ち着いて指導者の歌声を聞くより、歌うことも含めて音楽することに夢中になる時があるのではないだろうか。その時は歌の習得に役立たなくても、長期的な視点からは習得しているであろうと考えられる。

2日目の指導によって、歌詞とリズムの習得が14小節目以降良くなっているのが際立つように、旋律の習得についてもいえる。14小節目からは優しく流れるような旋律になっているのが特徴的である。

14小節目からは、Cのグループの歌声が一気に高まったり、C'の女兒たちがこのフレーズをスキップした。このことは、歌詞の影響と旋律線 (メロディライン) のノリからであり、彼女たちが感じたように、曲としての盛り上がりが増すことから幼児の記憶に残ったと考える。その結果、C、C'共に半数の子が正しい旋律で歌ったのであろう。

・「山羊さんとかけっこ」

dのグループでは、2日目に指導者が振りを間違えた時には女兒が「先生、こうやんか」と指摘するほどに、身体の動きを覚えている子がいた。歌声は小さいがどの子も良く動き、自分の考えた振りを付けたりと指導者とは違う動きをしていたが、途中から「先生 これしようよ」と曲の最後に両手をあげて飛び上がる振りの提案があり他の子たちも賛成した。前奏の時から腰に手をあて拍子をとる姿が見られるなど、音楽にのっていた。

d'のグループでは、ピョンピョンと飛び跳ねてみたり、よつんばいになったり、「かけっこ」の歌詞でかけっこをしたりと身体を動かす姿があった。指導終了間際になると歌声がしっかりしてきたが、始めから元気に声を出していたのは「メー」の歌詞の所であった。

表1によれば、歌声を音楽的なまとまりで評価した結果はd:リズム運動をしながら歌ったグループの方が、d':リズム運動をしないで歌ったグループより良い成績だった(d:3.04 > d':2.75)。そして、採譜した楽譜からの結果は、歌詞、リズム、旋律では明らかな差はなかった。

歌詞について ($d \approx d'$)

2回目の録音からの図16と前日に録音した歌声からの図15と比較しても明らかなように、d、d'共に歌詞の習得率は高くなった。

5小節目の歌詞「おひげをふりふり」では歌詞を飛ばしたり、「おひげをならべて」になるなどの間違いが目立った。このことは、幼児に印象の薄い言葉だからであろう。反対に、全員が習得するか、間違いの少なかった歌詞は「かけっこ」のように日常的な言葉が歌詞になっている場合である。このことについてはdとd'の差は見られない。

リズムについて ($d \leq d'$)

d'のグループは1回目の録音でリズムが取れているかそうでないかの差が大きく出ていたが、2回目の録音からは図20の如くに、平均的にどの小節も歌えるようになった。

13小節目 ♪ ♪ ♪ ♪ のリズムを ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ と間違えるのは3小節目のリズムの影響であろうが、9小節目の間違いについては、d、d'共に、言葉のリズムと歌のリズムのズレからである。幼児が言葉のリズムから開放され、歌のリズムに移行するには歌う経験と、歌を聞く経験が必要と考える。

旋律について ($d \geq d'$)

歌声を聞いていると聞き逃すような部分や、ほんの少しのズレの間違いを点線で表している図24からは、正確に歌った実線との差が明らかになった。特に、1小節～5小節の間の差がd、d'に著しい。この点については、正確な旋律ではないが、幼児が“それらしく”歌ったということであり、旋律のおおよそのところは感じ取れていると考えられる。

2-3 3日目の指導を終えて

・「ピノッキオの歌」

Cのリズム運動をしながら歌うグループは、男児は指導者が模範を示そうとしても指導者と一緒になって動き、歌う。女兒は座って指導者を見ていながらも、身体や腕を動かして小さな声で歌っている。女兒は教えられたとおりにしっかりリズム運動をしているが、男児は前奏の時から自分の動きを入れたり、歌の合間に思い付いた動きを入れるなど、真面目なのか不真面目なのか、しかし、楽しそうであった。

C'の歌うだけのグループでは、指導者が「ピノッキオの歌を歌いましょう」と言うやいなや、「やったー」「きゃー」「わぁー」「手つないでやんのやに」「うしろで歌いたい」の言葉が飛び交った。すぐさま女兒は全員が一行に並んで手を繋いで歌う用意をした。

歌い始めれば女兒は14小節目からスキップをしたり、歌の終わりに両手を挙げてポーズをするなど活発であった。男児は女兒の回りをウロウロしていた。

表1によれば、歌声を音楽的なまとまりで評価した結果は、C:リズム運動をしながら歌ったグループの方が、C':リズム運動をしないで歌ったグループより良い成績だった(C:

3.50>C':2.85)。そして、採譜した楽譜からの結果は、歌詞、リズム、旋律でCとC'の明らかな差はなかった。

歌詞について (C≒C')

3日目の指導の結果、CとC'は図5のように歌詞を習得した。3、20小節目の歌詞は「ピノピノピノピノ」に歌い慣れてしまったようで、この歌詞の方が歌い良い語呂なのであろう。14小節目からのフレーズの歌詞はすっかり習得してしまったように正しく歌っている。

10～13小節の歌詞「げんきな おしゃべり わんぱくこぞう」を「げんきな おしゃべりな わんぱくこぞう」と歌っていた幼児たちが歌詞どおりに歌っていたように、日常会話の言葉から歌詞としての言葉へと意識が向いたようである。

リズムについて (C≒C')

図9の如くに、C'のグループでは8割の子が5小節目の4拍の休符を正確に取っている。Cのグループに比べると、Cのグループには4拍の休符に手を4拍叩くという動作を指導していたにも関わらず、C'の歌うだけのグループの方が非常に良い成績であった。C'の子たちは3日間の指導で拍子感覚が判るようになったといえよう。

一方、Cの子たちは手を叩くことに頼っていたのであろうか、手を叩かないで歌った場合に4拍の休符を飛ばす子がいて、正しく休んだ子の割合が低くなった。休符で声を出さない場合には、幼児がどのように内的聴感覚で時間の経過をしているのか、内的聴感覚とリズム運動の関係は明らかにならなかった。

旋律について (C≒C')

3日目になると、一人で歌う幼児の歌声に自信や各人の歌への思い入れが感じられるようになった。指導者の歌声を聴き取りながら歌を覚える幼児には旋律、即ち、音程を正しく歌うことが最も苦手ようである。幼児は歌詞を覚えようとするところから歌の習得が始まり、同時に歌詞の言葉を合わせようとしてリズムの習得が始まっていた。本来、幼児が歌を覚えようとした時に最も気に掛けるのは歌詞であり最も気にならないのは音程であり、旋律はおおよそのところで納得しているようである。

幼児が聴き取りにくい音程は、音程の幅が広い場合と、歌詞が言葉の高低イントネーションにそぐわない場合であった。

そして、図13のように2回目と3回目の歌えた子の割合にあまり差が見られないのは、音程感覚の習得には時間がさらに必要ということではないだろうか。

・「山羊さんとかけっこ」

dのグループの子に「踊らないで歌うだけにしよう」と言ったが、「ううん 踊りたい踊りたい」と、幼児は動きを入れない「山羊さんとかけっこ」の歌は受け入れられなくなった。さらに、「ヘイ入れてへん ヘイ入れて」と歌詞を書いた紙に「ヘイ」を書き込むことを要求するように、歌の終わりに両手をあげて「ヘイ」といってポーズすることが幼児たちには“当然のこと”になってしまった。

d'のグループは指導者が「さぁ 歌いましょう」と言えば「イエーイ！」と声が出るように、全員がこの歌を気に入っている。指導者は歌に合わせて身体を動かすことを指導してないが、幼児の方から腰に手を当てて歌ったりなどの振りが入る。特に男児に多い。

表1によれば、歌声を音楽的なまとまりで評価した結果はd：リズム運動をしながら歌ったグループの方が、d'：リズム運動をしないで歌ったグループより良い成績だった (d：3.86

$> d' : 2.58$)。そして、採譜した楽譜からの結果は、歌詞は $d \approx d'$ リズムと旋律は $d > d'$ で正確に歌っていた。

歌詞について ($d \approx d'$)

どちらのグループの子も自信をもって歌っている。歌詞を間違えるのは「ぼくらもげんきに」を「みんなもげんきに」のように、意味の近い関係で、一瞬の勘違いのような言葉になっている場合である。あるいは、その時に瞬間に忘れたような場合である。14小節と歌が短いこともあろうが、ほぼ全員が歌詞を習得した。幼児が歌の世界をイメージしながら歌えることも歌詞の習得に大きく役に立っていると考えられる。

歌う時にリズム運動をするかどうかの明らかな差は歌詞の習得については見られなかった。

リズムについて ($d > d'$)

dのグループはどの子も正確なリズムで歌っていたが、d'のグループでは3、9小節の付点四分音符と八分音符のところ、5小節目の歌詞が思い出せなかったところで間違えていた。歌詞を覚えたという自信のような気持ちからであろうか、リズムの習得はそれぞれの小節によって差があった。

リズム運動をしながら歌ったdのグループの方が正確にリズムを歌っている子が多いことから、リズム運動はリズムの習得に効果があるといえよう。

旋律について ($d > d'$)

dのリズム運動をしながら歌ったグループは、旋律を正確に習得していなくても歌としての音楽的なまとまりをもって歌っていた。正しく歌った子が特に少なかった1、3、4小節は、音程が上がりきらなかったりと少しのことで正確ではなかった。

d'のグループも音楽のまとまりとしては全体をつかんでいるようであるが、5小節目の連続同音の維持が不安定であったり、音程が少しのところでは上がりきらなかったり下がりきらなかったりと不安定であった。

2-4 4日目(一ヶ月後)の指導を終えて

・「ピノッキオの歌」

Cのグループでは歌詞を書いた紙を見るやいなや「ピノッキオ」と部分的に歌い始める子がいて、その子の後を別の子が歌い継ぐように、歌を共有した時の歌の楽しみ方になっている。男児が自分のぼうず頭をさすりながら8、9小節の歌詞「とんがりばなの かわいいこ」を「とんがりぼうずの はげぼうず」とくちずさむ程に、歌を自分のモノとしていた。

指導者と一緒の時には女兒は指導者と同じように動くが、男児は「ライダーキック」の真似や「ブー」とポーズを入れるなどして愉快そうに歌っていた。

C'のグループでは、指導者が歌詞を書いた紙を貼ろうとすると「見やんでもわかるわ」と男児が言ったのに合わせて、他の子たちも口々に「見やんでもわかるー」と言う。しかし、指導者は「わからない子がいるかもしれないから」と貼ったままにしておいた。

歌いながら6人の女兒は手を繋いで振ったり、踊ったりしている。座っている子たちも楽しそうに歌っている。男児が歌の最後に「ヘイ」と入れていた。女兒が「先生(歌詞を書いた紙に)ヘイ入れてへんやん」と抗議にきた。「入れよう 入れよう」の声が多いので、どうするか全員の意向を聞くと、賛成ばかりではなかったが、入れることになった。

表1によれば、歌声を音楽的なまとまりで評価した結果は、C:リズム運動をしながら歌ったグループの方が、C':リズム運動をしないで歌ったグループより良い成績だった(C:

3.39>C':2.73)。そして、採譜した楽譜からの結果は、歌詞、リズム、旋律でCとC'の明らかな差はなかった。

歌詞について (C=C')

C、C'共に、前回一緒に歌ってから1ヶ月後、幼児の歌声は1ヶ月の時間を感じさせなかった。むしろ、自信に満ちた歌声であった。図6のように、彼等のアレンジも変わっていない。指導時には正しい歌詞の確認を取っていたにも関わらず、録音時には自分の気に入った歌詞で歌っている。

幼児は歌い始めれば正しく教えられたとおりに歌うつもりでも、気持ちから出た歌詞（それが間違っている）で歌ってしまうようである。例えば、9～13小節の歌詞「げんきな おしゃべり わんぱくこぞう」を「げんきな おともだち わんぱくこぞう」と歌うなど、替え歌ではないが、幼児の気持ちが自然な形で歌詞に折り込まれている。

リズムについて (C≧C')

図10によれば、C'のグループでは1ヶ月前より5小節目の全休符を正しく休める子は少なくなり、Cのグループでは増えている。

リズム運動をしながら歌ったことは、身体で拍子感覚を習得するのに役立つであろうか。しかし、1ヶ月前にはC'のリズム運動をしないで歌を覚えたグループの子の方が、休符を正確に休んだ子は多かった。

内的に音楽を感じ、長い休符を正確に取れる感覚は音楽的な能力として優れているが、図7～10の5小節目の推移から、内的聴感覚とリズム運動には何らかの関係があると考えられる。

指導を重ねた直後の録音は指導効果が強く、普段以上に上手に歌えるかもしれないが、1ヶ月後の歌のリズム習得状況は、幼児が本来の自分の実力で歌ったリズム感と一致すると考える。

旋律について (C≒C')

リズム運動を指導したか、しなかったかによる旋律の習得には明らかな差は見られない。CとC'で間違いやすい音程、歌いやすい旋律は共通している。

14小節目から後のフレーズの旋律は、2日目と3日目に歌えた子の割合の差はあまりなかったが、図14のように、1ヶ月後には旋律を正しく歌った子が増えている。そして、4、9、12小節の音程のズレ、特に、12小節の2度ずつ順次下行する旋律の音程は歌詞の言葉の高低イントネーションによるであろうが、C、C'共に幼児独自の高低で歌っていた。

幼児が歌を習得する時の手掛かりとして2つの点が考えられる。1つは「ピノッキオ」「かけっこ」「メー」のように、歌詞を理解できる、覚えやすいなどの場合であり、もう1つは旋律線が幼児の琴線に触れる場合である。例えば、C'の女兒たちが手を振ったりしながらも14小節からは動きを変えたように、幼児がフレーズを感じるような旋律は習得度が高くなる。

・「山羊さんとかけっこ」

dのグループでは、仲間が歌いながら動くのを見て拍に合わせて手を叩くなど、一人ではなく仲間と向き合って音楽を楽しんでいるような状況が生まれた。全員の歌の習得度が揃って上がったことがこのような状況になったと考えられる。指導者と幼児ではなく、幼児と幼児がこの曲を楽しむようになった。

d'のグループでは、1ヶ月前までは後ろの方で気乗りがしない様子で歌っていた男児が、明るい表情で歌っている。彼は楽譜7～10の如く、歌の習得がのんびりしていたので、仲間たちに気後れしていたと思われる。しかし、1ヶ月後に彼は仲間と一緒にはっきりした声で歌っ

ていた。おそらく、彼はこの1ヶ月の間に仲間が遊びながら歌っているのを耳にしたり、ともにくちずさんだりしながら自然に歌の欠けていた部分を覚えたのであろう。自分なりに“歌える”自信が付いた頃に、全員で揃って歌う機会があった。このことが彼を明るい表情に導いたと考える。

表1によれば、歌声を音楽的なまとまりで評価した結果は、 d ：リズム運動をしながら歌ったグループと、 d' ：リズム運動をしないで歌ったグループの差はなかった ($d: 3.31 > d': 3.02$)。そして、歌詞、リズムは $d \approx d'$ 、旋律では $d > d'$ で正確に歌っている子が多かった。

歌詞について ($d = d'$)

1ヶ月の間に仲間と揃って歌う機会はなかったにも関わらず、1ヶ月後の方が歌詞を間違う子は1人か2人に減っていた。10小節「むこうまで」の歌詞を「むこうで」「むこうの」「メー」を「ヘー」と歌うような間違い方である。この曲のイメージは幼児にすっかり定着したようで、その結果、歌詞の習得度が高くなったと考えられる。

歌の習得には、幼児が歌おうと“音楽にのる気持ち”をどのように引き出すかということが大事である。リズム運動は幼児が積極的に歌を楽しめるような“音楽にのせる効果”をもつが、歌詞に限ってのその習得効果の検討は難しい。

リズムについて ($d \approx d'$)

d と d' が正しく歌ったり、間違いやすいリズムは共通している。しかし、 d の方に正しく歌った子が少し多かった。このことは、普通に歌うことより、積極的に身体を動かしながら歌を歌うことでリズム感が習得できるということになるのか。指導者の意図した動きはあったが、幼児の自由な動きを取り入れた。そうすることで、幼児はさらに積極的に動き、喜びながら歌を歌った。その結果、リズムの習得が良かったと考える。

旋律について ($d > d'$)

d と d' のグループの一人一人は上手に歌った。しかし、正確な検討では図26の実線の如く、旋律は正しくなかったのである。上手に聞こえたのは点線のレベルであった。

幼児は1ヶ月前に指導者の歌声を聞いて以来、この曲を聞くとすれば仲間の歌声であった。子ども同士で歌い合い、影響し合って覚えた歌の旋律には曖昧な音程が含まれ、その旋律が定着してしまったのであろうと考える。

d' のグループは歌いながら身体を動かすことを幼児から望んだ。音楽で動く楽しさを既に知っている幼児は、仲間と一緒に歌うことも楽しいけど、歌いながら動くのもっと楽しいことを察知した。しかし、 d のグループのように指導者の意図した動きがなく、幼児の思い付きの動きで各人の自由に任し、全員がいつも動くようなことではなかった。 d' の子たちは、歌うだけでは音楽するのに充分でないことを自ら実証したといえよう。

そして、音楽する楽しさを経験することが旋律の習得に役立ったと考える。

お わ り に

今回の発表は、リズム運動をしながら歌うグループとリズム運動をせずに歌うグループの歌の習得過程を調べることによって、リズム運動が歌唱能力の発達にどのように影響を与えるかを明らかにすることであり、その目標は達成された。

指導の目的は歌唱力を高めることであり、歌唱指導のために指導者はリズム運動を用意した。そして、幼児の動きたい気持ちを大切にするために、指導者は幼児の発想からの動きを自由に

取り入れるように心掛けたのであった。

また、歌うだけの歌唱指導のグループで、幼児が歌うことから動きを生み出した場合、幼児の中から出た動きは自由に任せた。その結果、仲間に波及して身体の動きや歌声が活発になる場面が見られた。幼児からの動きの活動によって歌唱力の向上に役立つことがあると考えるが、歌うという“音楽する”状態を歌うことだけに限定するのは不自然であるとの考えから、実験の条件統制には無理があることを承知で実行した。

「幼児の歌の習得過程に関する分析研究」の実験をしながら判ったことは、幼児期の歌唱指導には“音楽をやる中で歌を覚える”式の指導が望ましいということであった。椅子に座って歌う式ではなく、日本のわらべうたや外国の遊び歌のように、手あそびのうた（指導者や幼児が考えたものも含む）のように、歌に合わせて身体を動かすリズム運動のように等、歌と歌に付随する諸々の事柄を一体化した歌唱指導のあり方を問う必要がある。

音楽がわかるためには理解しながら経験を重ねることであるが、音楽は理屈抜きに心の中に入る。その時、幼い子は自分の気持ちを表に出すかのように、本能的に身体を動かしている。音楽の拍やフレーズとは関係なく、ただじっとしてられない状況として身体を動かしているのであろうが、このような湧き出てくる気持ちと身体の動きこそが、自己の表現の第一歩である。このような現実的な表現を基盤にした音楽活動を進めることから音楽教育が在るように考える。

歌唱指導の期間中1ヶ月の空白に、子ども同士の教え合い（教えようとして教えたのではなく、相手が勝手に真似て学びとっている）によって指導者の存在しないところで学習していることがあった。このように、豊かな音楽経験を広げ、音楽能力の発達に応じて伝え合う喜びや楽しみを日常的にすることは、子ども社会の遊びを豊かにすることにもなる。

現代は情報化が進む文化状況の中にあるが、音楽本来の形として、人と人との間で音楽を経験することが幼児期には大切であろう。

引 用 文 献

- 1) 小谷節子「テレビ幼児体操のうぶ声とルーツ」月刊『音楽広場』1989 3月
- 2) 小林美実「お遊戯からあて振りへー戦争の影」月刊『音楽広場』1989 9月

参 考 文 献

- 1) 高橋昭弘「音楽と身体性・総合への志向」『民族音楽叢書10』東京書籍株式会社 1991
- 2) ルドルフ・ラバン「身体運動の習得」神沢和夫=訳 白水社1985
- 3) NHK放送世論調査所編「幼児の生活とテレビー0歳から6歳までー」日本放送出版協会 1981

付 記

本研究は昨年度「幼児の歌の習得過程に関する分析研究(1)ー手あそびについてー」に続く発表であり、本稿は1991年日本保育学会全国大会で口答発表したものにさらに詳しい検討を加えてまとめた。

研究のための実験には三重大学教育学部幼児教育専攻 幼児音楽ゼミ38期生石川祐子・太田久美子・川村兼世・白井理子・藤波寛子・水谷香魚・三芳亜由美・渡辺昌子の協力があった。なお、中西の指導のもとにこの実験結果を使い8人で4つの卒業論文をまとめたため、一部データ、イラストの使用は中西の論文と重なっている。

実験に全面的にご協力いただいた三重保育院の玉置さよ子院長・五歳児担任朝倉和代先生に感謝致します。最後になりましたが、中西のもとへ内地研究員として来ていた滋賀女子短期大学奥田恵子助教授にも相談にのっていただきましたこと感謝致します。

楽譜 1

ピノキオの歌

東 康 介 作詞
山 本 澄 子
田 中 正 史 作曲

明るく快活に



mp

1. ビノッ キ オ ビノッ キ オ ビノビノビノキオ
2. ビノッ キ ズ ビノッ キ オ ビノビノビノキオ

ピノッ キ オ あ や つ り に ん きょう
ピノッ キ オ あ や つ り に ん きょう

f mp

木 の に ん きょう と ん が り ば な の か わ い い 子 げ ー ん き な
木 の に ん きょう め ー だ ま く り く り あ か る い 子 わ が ま ー ま

おしゃべり わんぱくこそ う ま ら は あ
いたずら あ ば ー ん ぽう ま ち は ひ

mf

お い ぞ さ あ お ど れ ビノッ キオ
ろ い ぞ さ あ は し れ ビノッ キオ

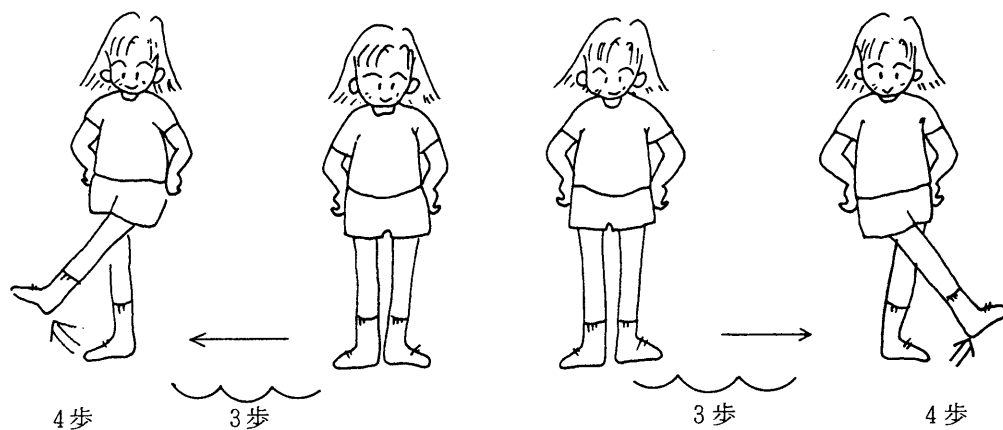
f

ビノッ キオ ビノッ キオ ビノッ キオ
ビノッ キオ ビノッ キオ ビノッ キオ

mp

図1 「ピノッキオの歌」のリズム運動

A ピノッキオ



ピノッキオ

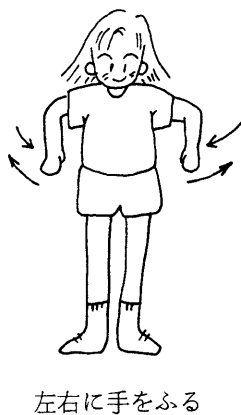
B ピノピノピノピノピノッキオ



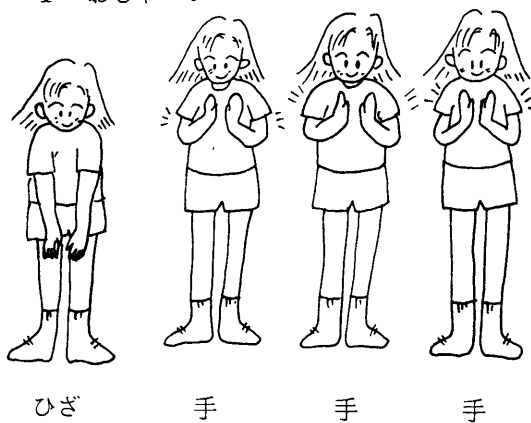
C 全休符



D あやつり人形 木の人形
とんがりばあなのかわいい子



E げんきな
F おしゃべり



G わんぱくこぞう



その場で
足ぶみ

H そらは あおいぞ さあ おどろう



手を4回
大きくまわす。

A ピノッキオ ピノッキオ

最初と同じ

B ピノピノピノピノピノッキオ



スキップ
する



「(ピノッキ)オ」でポーズする

振 り 中西 智子
水谷 香魚

イラスト 小池 朋子

山羊さんとかけっこ

吉岡治 作詞

小林亜星 作曲

早川史郎 編曲

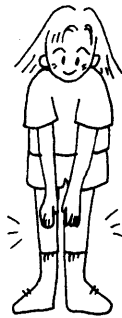
たのしく ♩ = 168

図2 「山羊さんと かけっこ」のリズム運動

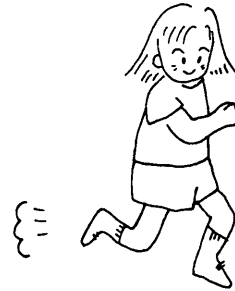
A やぎ
とこ



さんと
とこ



かけっこだ
かけっこだ



B おひげを
ぼくらも



ふりふり
げんきに



メエー
メエー (左右の手をかえる)



C はらっぱの



むこうまで



A やぎ
とこ



さんと
とこ



かけっこだ



かけっこ



ジャンプを
して手を
ひろげる

振 り 中西 智子
白井 理子

イラスト 小池 朋子

楽譜3 「山羊さんとかけっこ」

1回目 8月3日収録
Cグループ女兒

やぎさん かけこ だ

とこ ところ かけこ だ おひげをふりふり メー

ぼくもげんきに メー はらっぱの むこまで

やぎさんと かけこ だ とこ ところ かけこ だ

楽譜4 「山羊さんとかけっこ」

2回目 8月4日収録
Cグループ女兒

やぎさんと かけこ だ とこ ところ

かけこ だ おひげをふりふり メー

ぼくもげんきに メー はらっぱの

むこまで やぎさんと かけこ だ

とこ ところ かけこ だ

楽譜 5 「山羊さんとかけっこ」

3回目 8月7日収録
Cグループ女児

や ぎ さ ん と か け こ だ

と こ と こ か け こ だ お ひ げ を ふ り ふ り め え

ぼ く ら も げ ん き に め え は ら っ ば の む こ う ま で

や ぎ さ ん と か け こ だ と こ と こ か け こ だ

楽譜 6 「山羊さんとかけっこ」

4回目 9月5日収録
Cグループ女児

や ぎ さ ん と か け こ だ

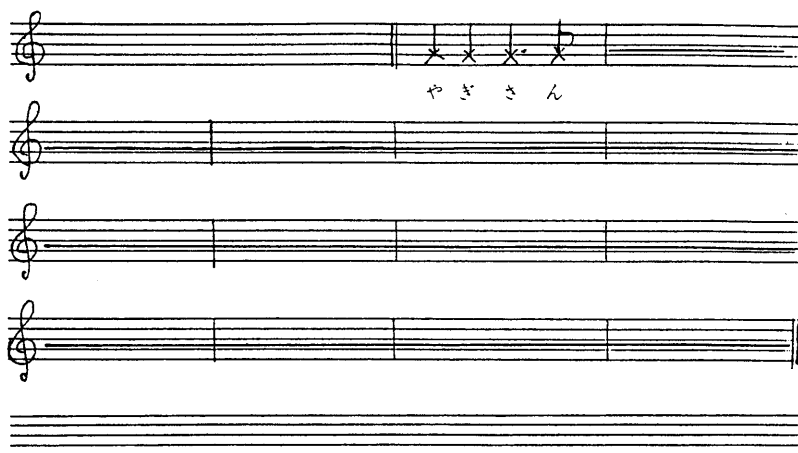
と こ と こ か け こ だ お ひ げ を フ リ フ リ メ

ぼ く ら も げ ん き に メー は ら っ ば の む こ う ま で

や ぎ さ ん と か け こ だ と こ と こ か け こ だ

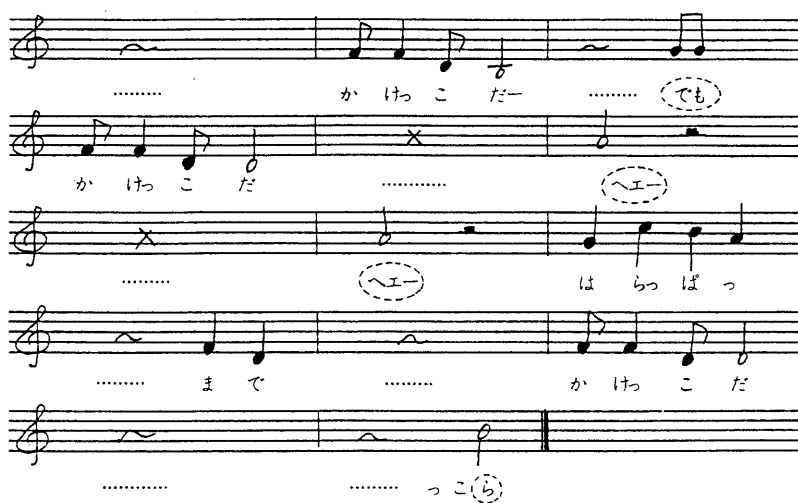
楽譜 7 「山羊さんとかけっこ」

1回目 8月3日収録
C'グループ男児



楽譜 8 「山羊さんとかけっこ」

2回目 8月4日収録
C'グループ男児



楽譜 9 「山羊さんとかけっこ」

3回目 8月7日収録
C'グループ男児

やぎさんと かけこ だ

..... こ かけこ だ

あれも かけこ だ とこ とこ かけこ だ

楽譜10 「山羊さんとかけっこ」

4回目 9月5日収録
C'グループ男児

やぎさんと かけこ だ

..... おひげをふりふり (エ〜)

ほくらもげんきに (エ〜) はらっぱの

むこうで やぎさんと かけこ (ら)

とこ とこ かけこ (ら)

中 西 智 子

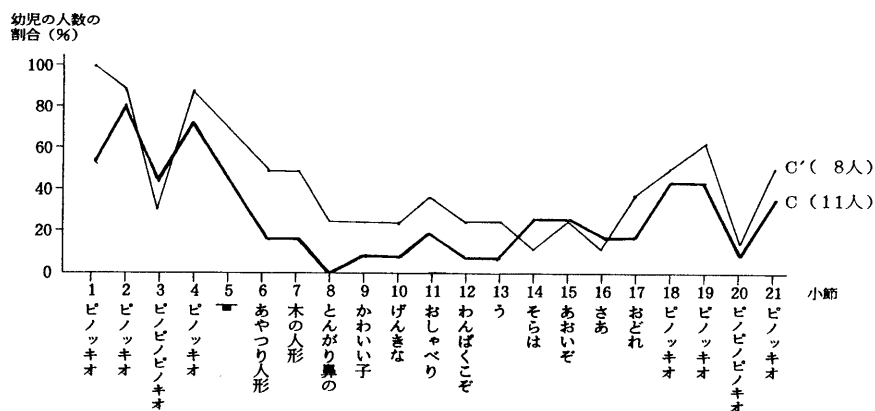


図3 「ピノッキオの歌」1回目に歌詞を正しく歌った幼児C、C'の比較

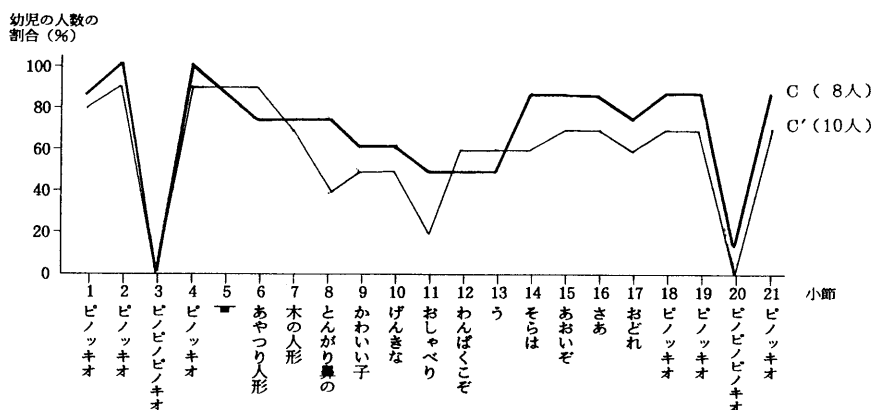


図4 「ピノッキオの歌」2回目に歌詞を正しく歌った幼児C、C'の比較

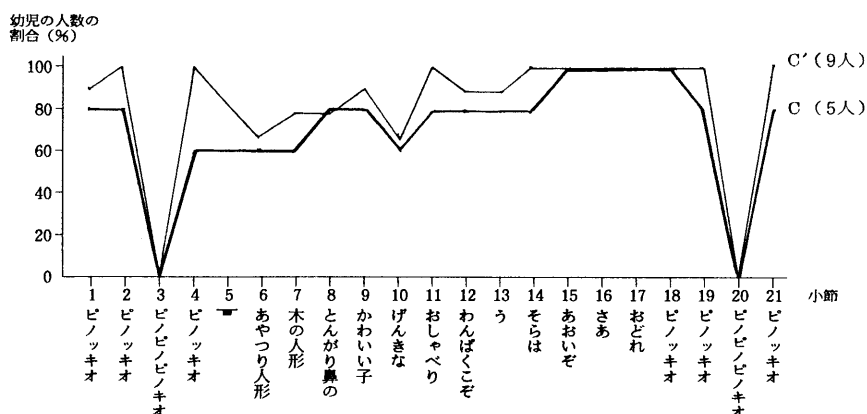


図5 「ピノッキオの歌」3回目に歌詞を正しく歌った幼児C、C'の比較

幼児の歌の習得過程に関する分析研究 (2)

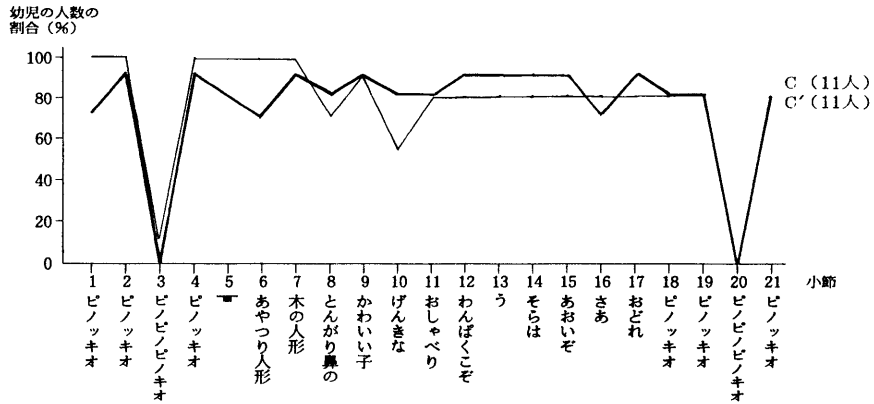


図6 「ピノッキオの歌」4回目に歌詞を正しく歌った幼児C、C'の比較

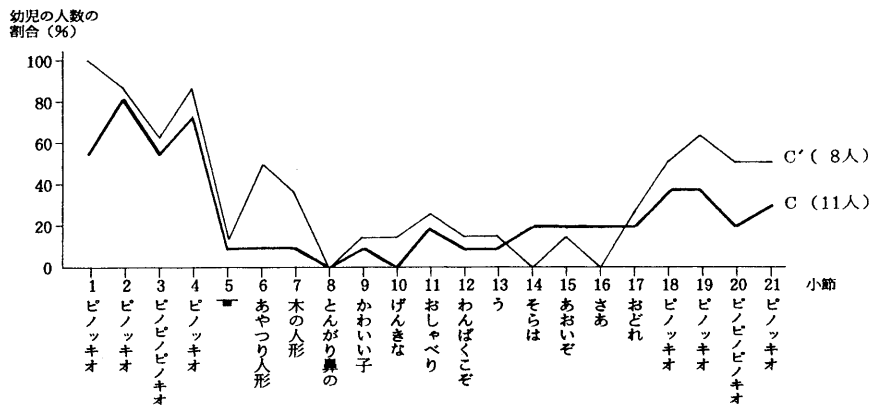


図7 「ピノッキオの歌」1回目にリズムを正しく歌った幼児C、C'の比較

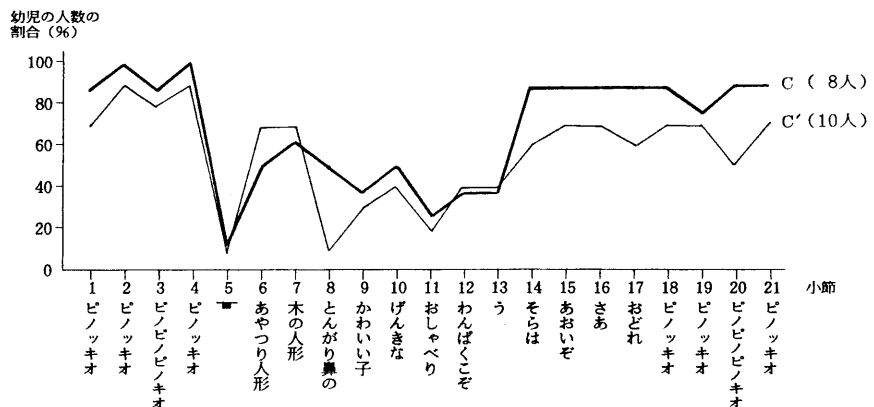


図8 「ピノッキオの歌」2回目にリズムを正しく歌った幼児C、C'の比較

中西 智子

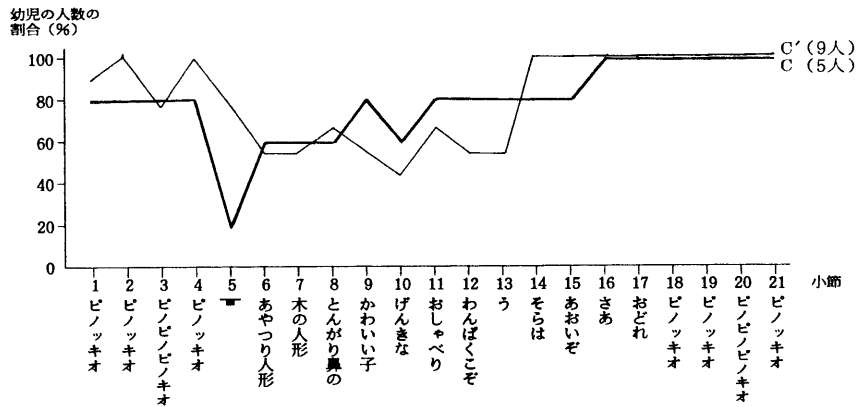


図9 「ピノッキオの歌」3回目にリズムを正しく歌った幼児C、C'の比較

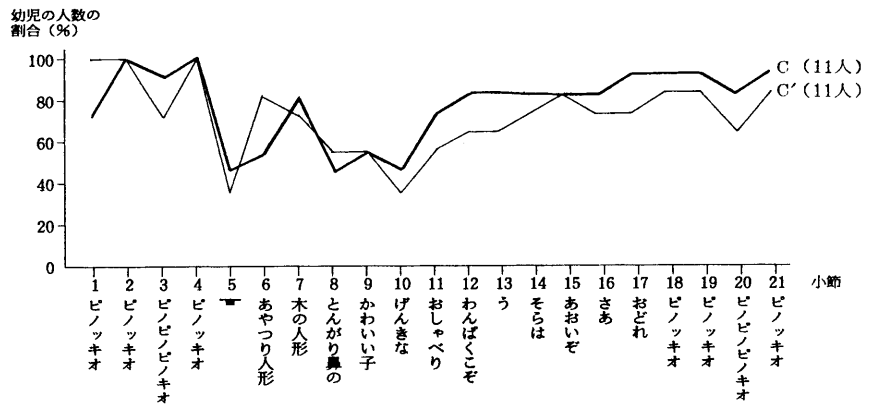
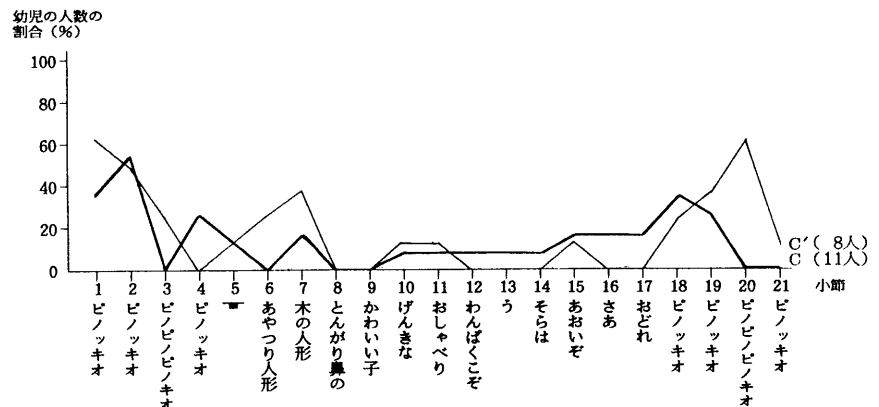


図10 「ピノッキオの歌」4回目にリズムを正しく歌った幼児C、C'の比較



幼児の歌の習得過程に関する分析研究 (2)

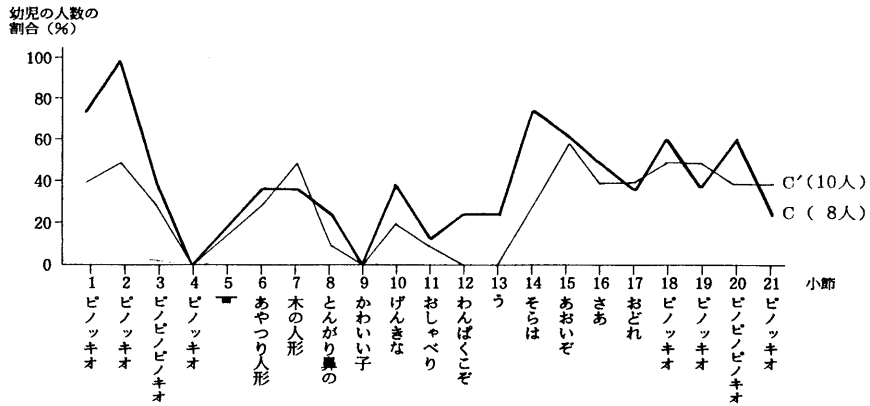


図12 「ピノッキオの歌」2回目に旋律を正しく歌った幼児C、C'の比較

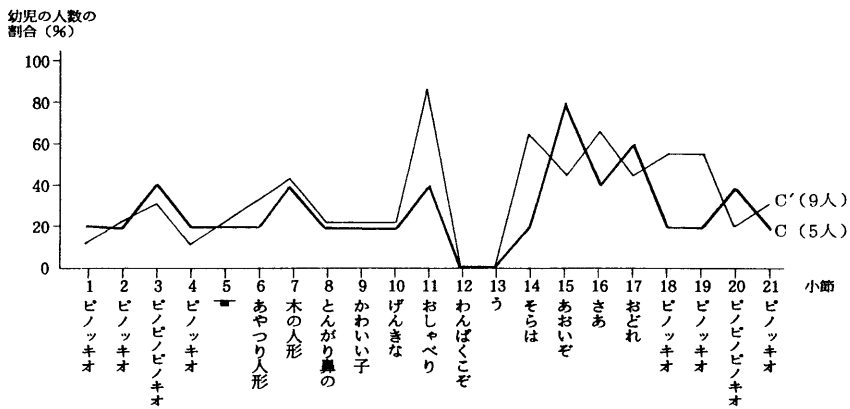


図13 「ピノッキオの歌」3回目に旋律を正しく歌った幼児C、C'の比較

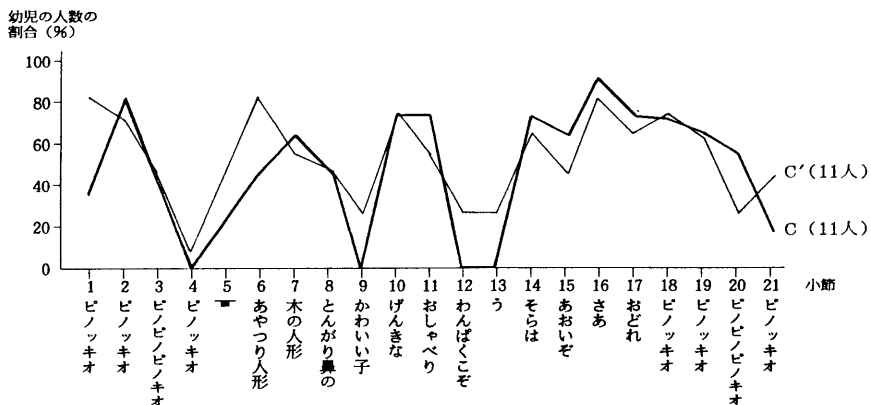


図14 「ピノッキオの歌」4回目に旋律を正しく歌った幼児C、C'の比較

中 西 智 子

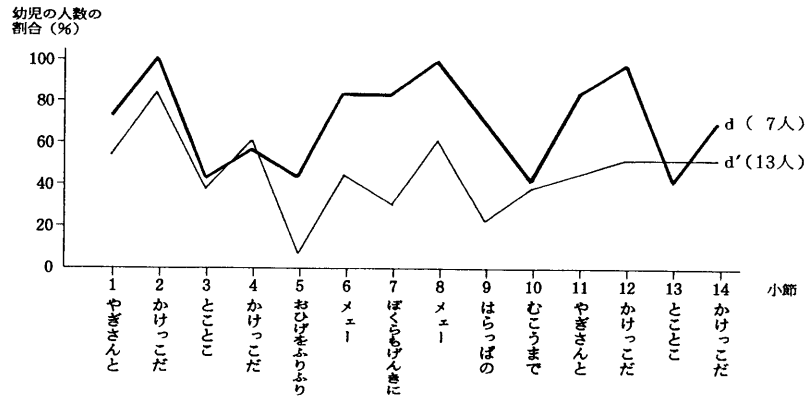


図15 「山羊さんとかけっこ」1回目に歌詞を正しく歌った幼児d、d'の比較

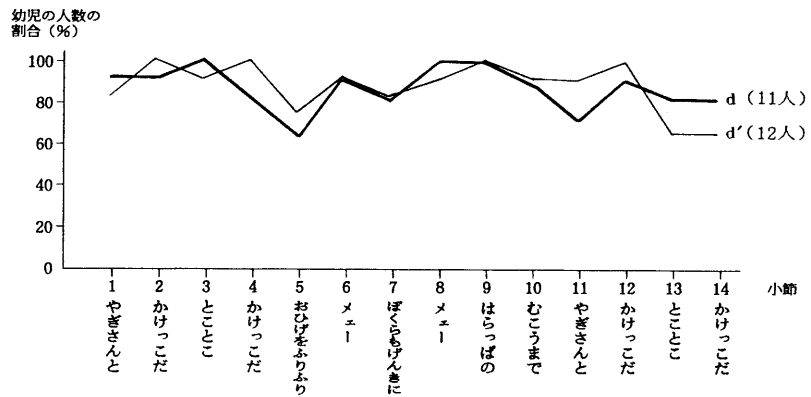


図16 「山羊さんとかけっこ」2回目に歌詞を正しく歌った幼児d、d'の比較

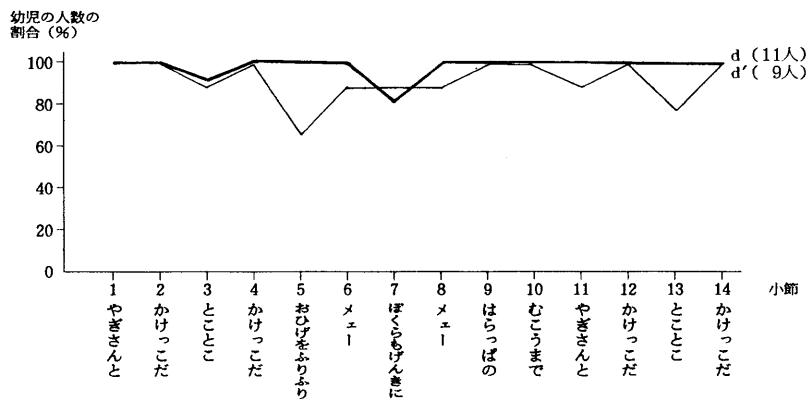


図17 「山羊さんとかけっこ」3回目に歌詞を正しく歌った幼児d、d'の比較

幼児の歌の習得過程に関する分析研究 (2)

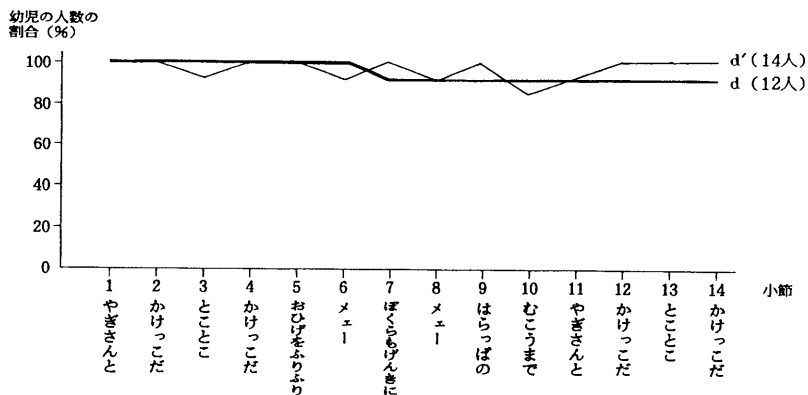


図18 「山羊さんとかけっこ」 4回目に歌詞を正しく歌った幼児d, d'の比較

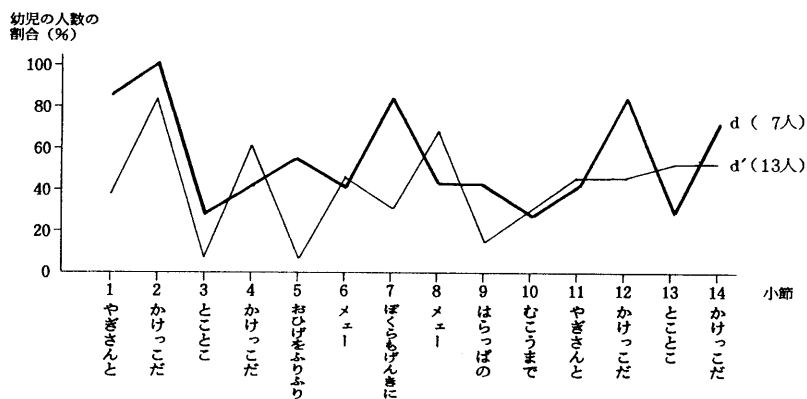


図19 「山羊さんとかけっこ」 1回目にリズムを正しく歌った幼児d, d'の比較

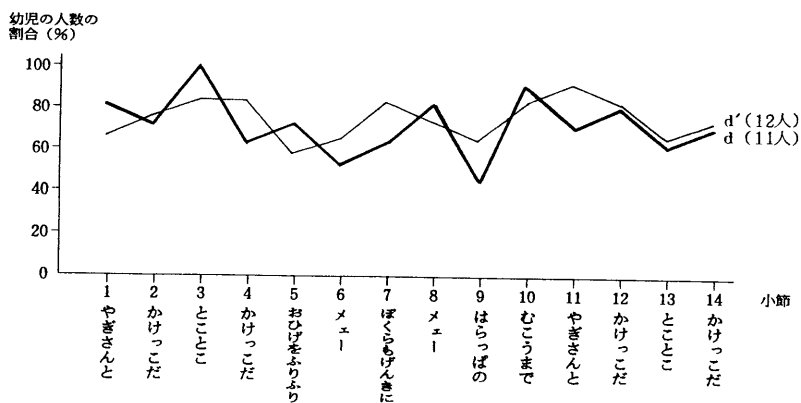


図20 「山羊さんとかけっこ」 2回目にリズムを正しく歌った幼児d, d'の比較

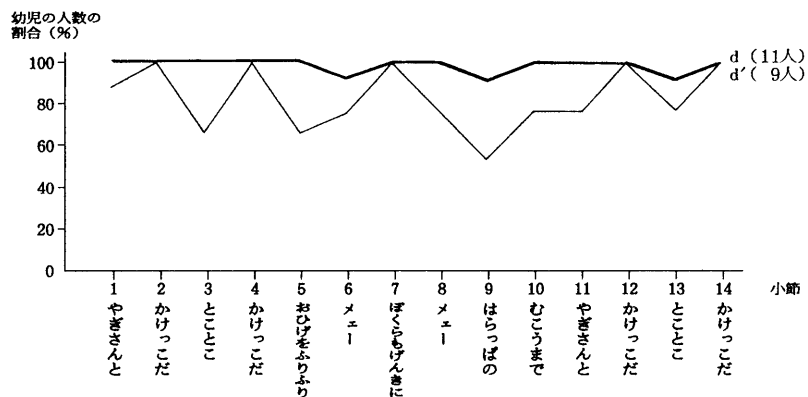


図21 「山羊さんとかけっこ」3回目にリズムを正しく歌った幼児d, d'の比較

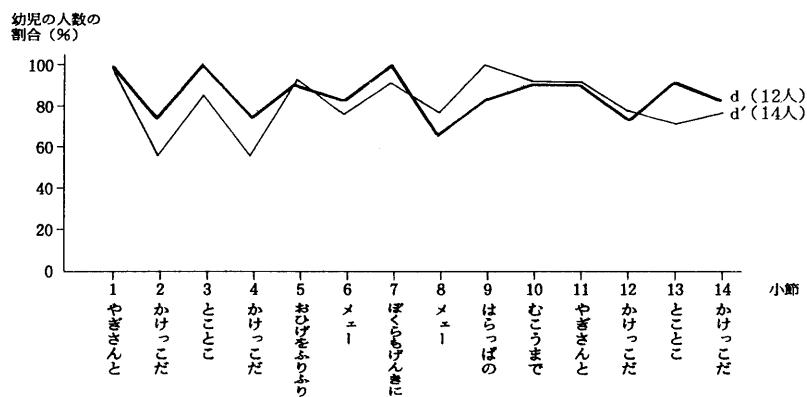


図22 「山羊さんとかけっこ」4回目にリズムを正しく歌った幼児d, d'の比較

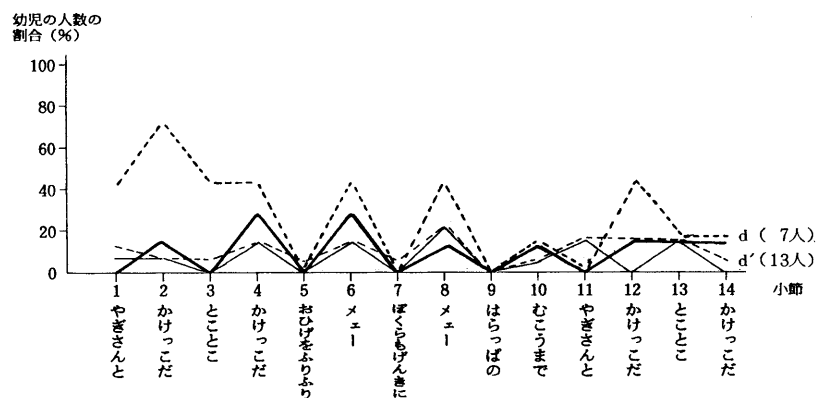


図23 「山羊さんとかけっこ」1回目に旋律を正しく歌った幼児d, d'の比較

幼児の歌の習得過程に関する分析研究 (2)

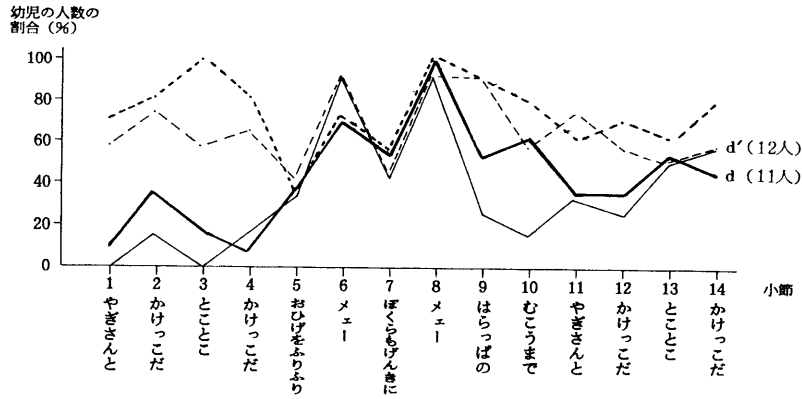


図24 「山羊さんとかけっこ」2回目に旋律を正しく歌った幼児d. d'の比較

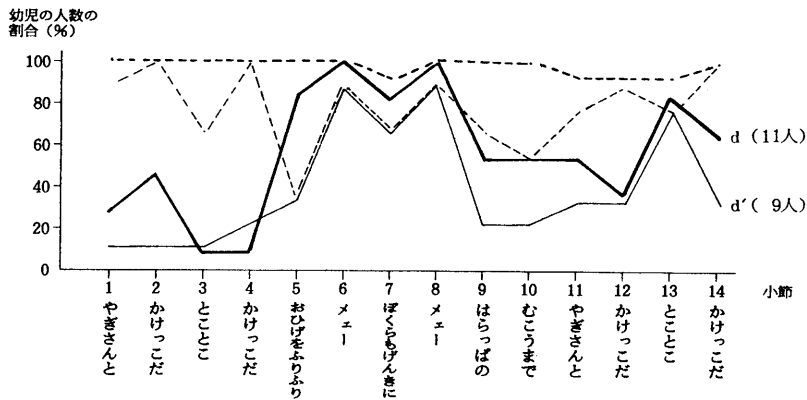


図25 「山羊さんとかけっこ」3回目に旋律を正しく歌った幼児d. d'の比較

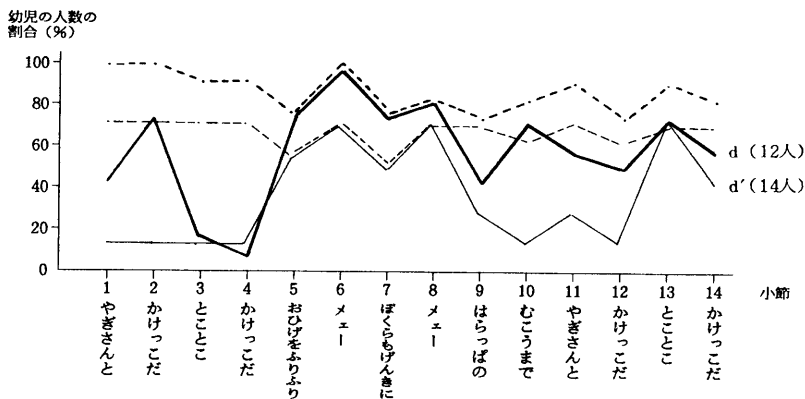


図26 「山羊さんとかけっこ」4回目に旋律を正しく歌った幼児d. d'の比較